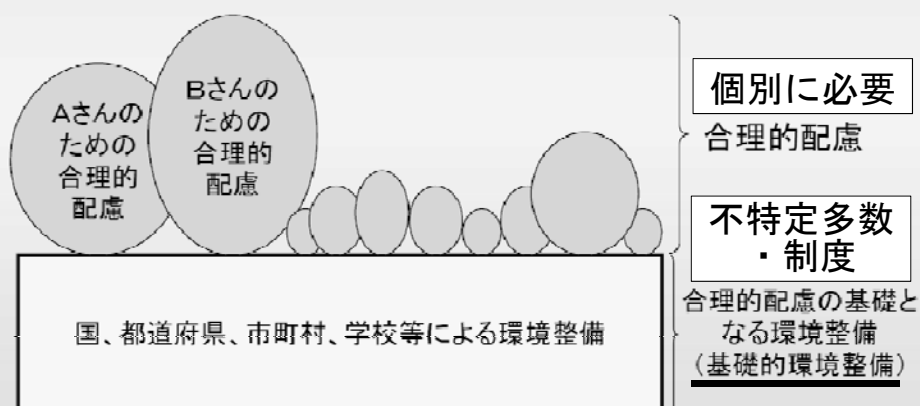


共生社会の形成に向けた インクルーシブ教育システム ～合理的配慮・基礎的環境整備編(2)～

愛媛県総合教育センター
相談支援部 特別支援教育室

合理的配慮と基礎的環境整備の関係

設置者・学校が実施



*参考:中央教育審議会初等中等教育分科会「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のため特別支援教育の推進(報告)」平成24年7月より

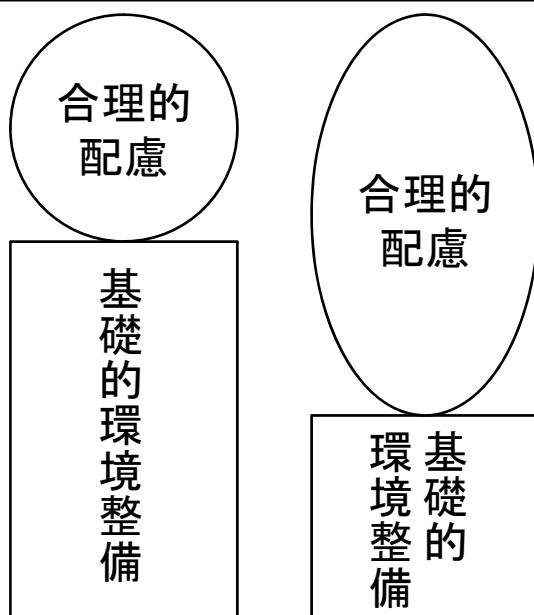
※「平成26年度 合理的配慮普及推進セミナー」(文部科学省)資料参考に作成

「基礎的環境整備」

- (1) ネットワークの形成・連続性のある多様な学びの場の活用
- (2) 専門性のある指導体制の確保
- (3) 個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成等による指導
- (4) 教材の確保
- (5) 施設・設備の整備
- (6) 専門性のある教員、支援員等の人的配置
- (7) 個に応じた指導や学びの場の設定等による特別な指導
- (8) 交流及び共同学習の推進

※「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」より

合理的配慮と基礎的環境整備の関係



基礎的環境整備について

「基礎的環境整備」を進めるに当たっては、ユニバーサルデザイン（※５）の考え方も考慮しつつ進めていくことが重要である。

（※５）バリアフリーは、障害によりもたらさせるバリア（障壁）に対処するとの考え方であるのに対し、ユニバーサルデザインはあらかじめ、障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインする考え方。

※「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」より

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例①

事例 1

通常の学級に在籍し、週に一度、通級による指導を受けている注意欠陥多動性障害と診断されているB市立C小学校4年生のA児

国立特別支援教育総合研究所『合理的配慮』実践事例データベースより

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例①

自分の理想と現実がうまくかみ合わず、納得のいくように物事が進まないときは、イライラする様子を見せることがある。

学習面では、興味のないことは、最初から取り組もうとしない。学校で楽しみなことがないと、眠ってしまうことも多い。予定変更が苦手で、事前の見通しをもたせることがとても重要である。

字を書くことは苦手だが、うまく気持ちをのせると、書道に取り組むことができる。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例①

基礎的環境整備の一例

(3) 個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成等による指導

障害のある児童に意図的・計画的に支援を進めるために、個別の指導計画や個別の教育支援計画に基づく指導を推進している。

A児の個別の指導計画については、通常の学級及び通級指導教室において作成している。個別の指導計画は、年度当初に保護者を含めた支援会議で作成し、10月頃に計画の評価・見直しを実施した。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例①

基礎的環境整備の一例

(4) 教材の確保

教材の工夫に加えて、学習過程が構造化されていた方が分かりやすい児童が多いことから、指導の流れを課題の把握、予想・見通し、解決・追究、検討・考察、まとめの5段階に整理し、全学年で取り組んでいる。学習過程を黒板にカードで提示し、児童が見通しをもって学習に取り組めるように工夫している。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例①

合理的配慮の一例

①－１－２ 学習内容の変更・調整

国語では、大きくプリントした詩など短文をなぞり書きしている。なぞることであれば、失敗につながらないため気分が乗りやすく取り組むことができる。算数では、単純な計算は習得できているため、A4用紙に一問ずつプリントされた計算問題をいくつか用意し、A児の様子を見ながら量の加減をしている。

通級指導教室では、学年を特定せずに、簡単な漢字や計算問題を通して文字を書いて基礎学力の定着を目指している。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例①

合理的配慮の一例

②－３ 災害時等の支援体制の整備

A児の様子によっては、クラス全体を学級担任一人で移動させることが難しい場合が想定されるため、A児が支援員とともに避難する体制をとっている。

③－２ 発達、障害の状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮

教室で自分の思い通りにいかないことがあり、イライラしてしまったときは、保健室に来てベッドに横になり、養護教諭に話を聞いてもらうなどして、気持ちを落ち着かせている。保健室以外では、教育相談室で活動することもある。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例②

事例 2

進行性筋ジストロフィーで、生活全般において介助が必要なE市立F高等学校普通科1年生のD生徒

国立特別支援教育総合研究所『合理的配慮』実践事例データベースより

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例②

全教科とも通常の教育課程で学習している。学習内容の理解は良好である。

現在、移動については、電動車椅子を使用している。書字は、自分でペンを持ち、前腕を机に乗せ、指先だけ動かして書いている。ペンの持ち替え等は、支援員が介助している。

食事は、家から持参したペースト状の食べ物を全介助にて摂取している。排せつは、同性の教職員と支援員の2名で介助している。体温調節が難しいため、配慮が必要である。

進路については、大学進学を希望しており、その目標に向かって学習している。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例②

基礎的環境整備の一例

(1) ネットワークの形成・連続性のある多様な学びの場の活用

E市の中学校と高等学校の間では、中高連絡会において、中学校から高等学校へ進学した生徒についての引継ぎが行われている。

D生徒についても、学校生活全般における介助方法、本人用の机の使用等、D生徒が在籍していたG中学校で行った具体的な支援について引継ぎを行った。また、入学後も数回にわたり、G中学校の特別支援学級担任がF高等学校を訪れ、介助方法等を実際に伝えた。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例②

基礎的環境整備の一例

(5) 施設・設備の整備

E市では、全小・中・高等学校にエレベーター、車椅子用トイレ（多目的トイレ）を設置している。

F高等学校には、エレベーターが1基、車椅子用トイレ（多目的トイレ）は8箇所に設置されている。

(6) 専門性のある教員、支援員等の人的配置

E市では、支援員を配置している。

F高等学校には、現在、2名の支援員が配置されている。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例②

合理的配慮の一例

①－1－1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮

D生徒が、教室で学習する際は、電動車椅子に専用のカットアウトテーブルを装着している。

入学当初は、支援員がD生徒の後ろに座り、必要に応じて介助していたが、筋力の低下により、後ろを振り向くことができず、D生徒の声が小さく聞こえないことがあったため、斜め前に座り、D生徒の要望にすぐ応じることができるようにした。

教科学習においては、ペンの持ち替えや姿勢の調整等が難しいため、常に支援員がそばにいて必要に応じて介助している。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例②

合理的配慮の一例

②－１ 専門性のある指導体制の整備

F 高等学校では、E 市が行っている巡回相談を活用し、D 生徒の介助方法について指導・助言を受けている。

また、学級担任、支援員、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、学年主任などの職員が、D 生徒の主治医である I 医大を訪問し、担当医師から D 生徒の身体的な状況、体の動かし方、食べ物の嚥下の状況などを聞いたり、リハビリの様子を参観したりして、学校での支援・介助の参考にしている。

合理的配慮と基礎的環境整備の実践事例②

合理的配慮の一例

③－２ 発達、障害の状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮

多目的トイレは D 生徒に特化したものではないが、D 生徒は体温調節が難しいので、血管を温めるために、多目的トイレでドライヤーを使用している。